熊日1959.11.10

水俣病

（5）

複雑な奇病の背後

双方で謙虚に協力を

病気の正体

マンガン説、セレン説、タリウム説、有機水銀説。三転、四転したあげく"奇病"といわれた水俣病も、やっとその正体をあらわそうとしている。熊大研究班の三年の歩みは、そのまま奇病を一歩一歩、土俵際へ追いつめていく歩いだった。一時は迷宮入りが伝えられるほどの難物だっただけに、班長の世良医学部長も、こんどは十中九まで間違いないと自信をみせている。このデータをもとに、通産省は新日窒に対し八幡への排水即時中止を命じ、衆議院農林水産委は熊大研究陣への予算増額を決議した。漁民たちも「やっぱり廃水だったか」というなずいた。だが現実はあと一歩のところで、最後のキメ手がなく、新日窒側の巻き返えしPRと相まって、いぜんもやもやして割り切れない。なぜ割り切れないのか。行政も貧しかった。大資本への気兼ね、漁民の声も小さかった。奇病の背後にひそむものは、奇病と同じくらい複雑怪奇なのだ。しかしたった一つ、奇病にとりつかれたら最後は死の覚悟が必要であることだ。

× × ×

熊大研究班が有機水銀説を打ち出すまでの歩みをもう一度ふりかえってみよう。

今年のはじめごろのことだ。熊大医学部病理教室は異常な興奮に包まれていた。ネコがついに水俣病そっくりの症状をみせはじめたのだ。同教室では十六匹のネコをつかって、有機水銀十一ミリグラムから一百四十六ミリグラムを毎日与えていた。そのうちの一匹が五日目に発症、つづいて他のネコも一カ月以内に全部狂い出したのだ。失調、失明、下痢、脱毛、異常運動、けいれん発作、どれを比べてみてもそっくりだ。そこで文献探しがはじまり、比較してみると、これもそっくり。解剖の結果も、いままでのどの物質よりも似て

病患者の尿のなかにも多量の水銀が発見された。さらに工場の製造過程を調べてみると、酢酸、硫酸、塩化ビニールを作るのにすべて、水銀を使っている。理学部が工場データではじきだしたところでは六百トンの水銀が海中へ流れでているという。長い水銀流失がつみ重なって、ついに限度に達し、発病したという見方が強まり、今年七月研究陣は「水俣病の主因としては有機水銀が最も疑わしい」と発表したのだ。そして発表はそれが工場廃水によるものであることを、はっきり示していた。

× × ×

熊大研究班がここまでたどりつくまでには実に二年の年月が費やされた。なぜこんなにおくれたのだろうか。公衆衛生教室の喜田村教授はこういっている。

「魚や貝で中毒した例はあるが、どの魚貝類をたべても中毒するという例ははじめてだ。重金属中毒の例が少なく、比較文献がとぼしかった。それに重金属の中毒症状はよく似ていて、判別しにくいし、物質がそのままの形で魚やネコの体内に入っているわけではなく、実験も時間がかかった。そしておまけに研究費はわずかしかない。こんな状況では、原因究明がおくれたのもやむを得なかった」

しかしこのほかにも、研究陣のなかに大資本への気兼ねや遠慮がなかったとはいえないようだ。ある教授は「工場廃水だということは最初からわかっていた。だが県一の工場を攻撃することで、工場が他へ取られれば、県民のためにプラスにはならないから遠慮していた」という。この発言は学者の良心を全く売り渡したものと批判されても仕方がないだろう。

× × ×

いずれにしても工場廃液への疑いは一段と濃くなった。残された最後のキメ手は魚が有毒化するメカニズムを突きとめることだ。このため県水試では、いま水俣湾のドベの中で、魚を飼い、ネコに与える実験をすすめている。有毒成分を濃縮していって、水銀がとり出せれば一〇〇%確実になるわけだ。「有機水銀を主因に、セレンなどの作用が加わったもの」――水俣病の正体はおそらく、こんな形で年度内にはっきりするだろう。

もちろんこの有機水銀説に対し、工場は真ッ向から反発している。工場対大学の論争は、いくらか泥試合の傾向さえみせている。

初から果ときめてかかるやり方は松川事件と同じではないか。政治裁判だ」といきまいている。だがわれわれが求めているのは学問上の論争ではない。一日も早く病気の正体がはっきりするよう、双方でもっと謙虚にデータを出し合い、研究せよという声が高まっている。いま一番おそれるのは、問題が政治的に解決されてしまうことだ。原因がウヤムヤのまま終るようなことがあれば、患者たちはもちろん、実験につかわれた千数百匹のネコだって浮かばれないというものだろう。

工場側が科学を知らないものだときめつけれは、大学側は「これは病気だ。医者でもないものが病気のことがわかるものか」と投げかえす。そのあげくが工場側の爆弾説だ。これはあっさり熊大側から否定されたが、工場側は「最

猫を使つて実験する熊大奇病研究班員＝熊大医学部で